ついに完成した！　私の悲願である〝ケッコン指輪〟が!!

この指輪があれば、深海棲艦との戦いも提督と艦娘の関係も大きく変わる。

試作第一号となるこの指輪を横須賀鎮守府に届ければ、私の研究はようやく一区切りを迎える。そうすればやっと……。

序章・ケッコン指輪

「いいかい？　これが今後の戦局を大きく左右するであろう、〝ケッコン指輪〟だ」
　内地に向かう船の中で父さんに見せられたもの。それは一対の指輪だったんだ。
　ケッコン指輪と名付けられた指輪は、父さんの長年の研究の成果だった。
「ねーねー。はめてみてもいい？」
　僕は無邪気にケッコン指輪を自分の左手の薬指にはめたいってねだったんだ。
「ああ。いいとも」
「わーい！」
　父さんがニッコリと笑ってくれたから、僕は大喜びで自分の指にはめたんだ。
「わぁ。キレイ……」
　ケッコン指輪は、普通の指輪にしか見えない。でも、不思議と引き込まれるものがあって、僕はまじまじとみつめた。
「いいかい？　もしもお前が一番だと思った艦娘に出逢ったのなら、もう一つのケッコン指輪を左手の薬指にはめてあげなさい」
　そう父さんがぼくの頭をなでながらささやくんだ。
「指輪をはめるとどうなるの？」
「ただはめただけでは何も起こらない。でももし、指輪をはめた艦娘と強い信頼と絆で結ばれた時、奇蹟は起きる」
　それがどんなものかは実際起こるまで分からないって、父さんは言うんだ。
「わっ？！」
　その直後だったんだ。いきなり船がゆれたのは。
　船の中に流れたアナウンスだと、深海棲艦におそわれて船が大破したって話だったんだ。
「逃げるぞ！」
「うっ、うん！」
　僕は手を引っ張る父さんに連れられながら、指輪が入ったケースを持ちながら逃げ出したんだ。
「わああっ！？」
　急ぎ足で甲板に上がろうとしたら、突然大爆発が起きたんだ。

「ううう……」
「だっ、大丈夫か……」
爆発にビックリして目を開けたら、そこには僕に覆いかぶさる父さんの姿があった。
「父さん？」
父さんの背中は爆風で、真っ赤に焼け焦がれてたんだ。
「お前は無事なようだな……。私はもう……駄目みたいだ……」
「っ！」
「指輪を持って逃げなさい……！　早く……！」
その指輪は人類の未来にとって必要不可欠なものだらって、父さんは僕に逃げろって言うんだ。
「ヤダよ、ヤダ！　父さんを置いて逃げるなんて」
僕は泣きじゃくりながら父さんの側にいようってする。
「その指輪は、父さんが生涯を懸けて完成させたものだ……。私が死んでも、その指輪がある限り父さんの心は生き続ける……」
「父さん……」
「お前にはすまないことをしたと思っている……。早くに母さんを亡くしてしまって、愛情らしいものを与えてやることができなかった……」
「……」
「これからは、お前が一番に決めた艦娘と幸せに……」
「父さん！　父さん……！」
そう言い残して、父さんはしゃべらなくなったんだ。
「……行かなきゃ」
僕は涙をこらえながら必死に走り出した。感覚で分かった。父さんはもういなくなったんだって。なら、僕は絶対に生き延びて父さんの研究成果であるケッコン指輪を届けなきゃって。
「はぁはぁ……」
息が切れそうになって、何とか甲板まで出ることができたんだ。
「あっ！」
だけどその瞬間船が大きく傾いて、僕は海面に滑り落ちそうになる。

「あっ……ああっ……！」
突起物にしがみ付きながら海面を見ると、そこには海中から青白い顔を出して不気味に笑う、深海棲艦の顔があったんだ。
「お前が、お前が父さんを……！」
許さない！　僕のたった一人の家族である父さんの命を奪ったお前を！　人類の敵である深海棲艦を目の前にして、僕は恐怖よりも憎しみが勝っていたんだ。
「まっ、待てー！」
深海棲艦は仕事を終えたと思って、海中に潜って姿を消す。敵を憎んでも、今の僕には何にもできなくて、悔しさだけが胸にこみ上げてくるんだ。
「くっ……！　ああっ？！」
必死に捕まって堪えようとするけど、非力な僕の腕じゃどうにもならなくて、僕は沈みゆく船と共に海へと飲み込まれていく。
（助けて、誰か……）
まだ死にたくない！　ここで死んだら父さんの大切な形見も無くなっちゃうし、あいつ等に復讐もできない。
生きたい！　そう心の中で叫びながら僕は海面に手を伸ばしたんだ。
「助けるのです！」
そんな時だったんだ。誰かが僕の腕をつかんでくれて。僕の意識はそこで途切れてしまった。

「だっ、大丈夫ですか……」
あれからどれくらいの時間が過ぎたのか分からない。でも僕は、呼びかける声で意識を取り戻した。
「君は……？」
誰だか分からない。でも、ぼんやりとした視界には、艤装を付けた少女の姿が浮かび上がっていた。
「君に……これを……」
彼女の名前は知らない。だけど、父さんが言ってた一番の艦娘には違いないって思って、僕は差しのべられた左手の薬指にケッコン指輪をはめたんだ……。

艦娘は何かと問われて、明確な答えを出せるものは少ないだろう。異世界の艦艇が少女の姿で転生する。それが一般的な認識であろう。

ここで疑問なのが、何故少女の姿をしているかということだ。

艦娘は単なる兵器だという認識を抱いている者は多い。確かに彼女たちに兵器としての一面があるのは否めない。

しかし、仮に兵器だとしたら、何故艦艇のまま転生しなかったのであろう？

艦娘たちが少女の姿をしていることには何かしらの意味があるに違いない。それが私の研究の出発点であった。

第一章・電なのです

あの事故から三年が経過した。十四歳になった僕は猛勉強の末、晴れて提督になることができた。

ブカブカでサイズの合わない軍服に身を包みながら、僕は着任の挨拶をしに横須賀鎮守府に出頭したんだ。

「失礼します！」

「うむ。よく来てくれたな」

執務室に入って海軍式の敬礼を行うと、厳格な雰囲気の司令長官は、僕を快く迎え入れてくれた。

「初めに言っておくが、君がその年齢で提督になれたのは、特例中の特例だ。そのことを念頭に置き、以後の軍務に励みたまえ」

「はい。分かっています。僕が提督になれたのは、父さんが遺してくれたこの指輪のお蔭だって……」

自分の左手の薬指にはめられたペアリングのケッコン指輪を眺めて、僕は遠い目をした。

人類と深海棲艦の戦いは熾烈を極め、艦娘の力によって劣勢を挽回しつつあった。

だけど、敵も次々と新たな深海棲艦を投入し、戦いは膠着状態に陥っていた。

その状況を打破するため、技術者だった父さんが開発していたのが、このケッコン指輪だったんだ。

艦娘に秘められた潜在能力を引き出せるアイテムって話だったけど、詳しいことは分からない。

だって父さんは、あの日の事故で帰らぬ人になってしまったんだから。

ケッコン指輪はこの一対しかない。父さんの研究所に行けば、研究資料はある。でも、研究所のある小笠原諸島近海は深海棲艦の脅威に晒されていて、あれから程なくして島民が内地へ全島疎開して、無人島になっている。

未知数のアイテムのために艦隊を派遣するのはリスクが大きいからって、研究資料は到底取りに行けそうにない。

「さて、提督になったからには艦娘を率いてもらわねばならぬのだが……まだ十四歳に過ぎぬ君に艦隊を任せるのはいささか荷が重い」

そこで、まずは一人の艦娘の指揮に当たってもらい、それで経験を養って欲しいという話だった。

「了解です。それで、その艦娘というのは？」
「当然、その指輪の片割れをはめた艦娘だよ」
「！？」
その言葉を聞いて、僕は一瞬胸がドキッとしたんだ。僕を助けてくれた、名前も知らない命の恩人である艦娘。
未知数であるケッコン指輪のことは最優先機密事項だからって、僕が指輪をはめた艦娘が誰であるのかは教えてくれなかった。
提督になる勉強中も気にしちゃいけないって思いつつ、いつもその娘のことが頭から離れなかったんだ。
（ようやく逢える……！）
僕は左手をギュッと握りながら、再会の時を今か今かって待ち構えたんだ。
「入りたまえ」
「はっ、はい！」
やや緊張したか弱い声で、その艦娘は執務室へと入って来た。
「電です。どうか、よろしくお願いいたします」
身長は僕より小柄で、十歳の女の子ほど。どこか自信なさげな目つきで茶髪のショートヘア。幼い外見にセーラー服はちょっと早いかなと思いつつ、そのギャップが可愛らしさを醸し出している。
そして彼女の左手の薬指には、僕と同じ指輪がはめられていたんだ。
「電、君が僕のっ！」
命の恩人なんだね。そう伝えようと心で思っていても、つい緊張しちゃって言葉を飲み込んでしまった。
「えっと、あの……あなたが電の司令官なのですね」
以前からお話は聞いていてずっと会いたいと思っていたのですって、電は僕にペコペコとお辞儀する。
「僕も、僕もずっと君に逢いたかった！」
ようやく命の恩人である君に会えて嬉しいよって、僕は左手を差し出して握手を求めたんだ。
「そう言ってもらえると、嬉しいのです！」
これからよろしくお願いしますね司令官って、電は満面の笑みで自分の左手を差し出してくれた。
「ふぅむ。何も起きんか」

指輪がはめられた掌同士で握手してみたけど無反応。早速指輪の効果が発揮されると期待していた司令長官は、拍子抜けした顔で僕たちを見つめた。
「そのようですね。父さんからは『指輪をはめた艦娘と強い信頼と絆で結ばれた時、奇蹟は起きる』って聞いたんですけど」
僕たちは互いに再会を楽しみにしていた。もう想いは通じ合ったと思うんだけどなぁ。
「どうやらより親密になる必要があるみたいだな」
司令長官は髭の生えた顎に手を当てながらしばらく考え込んで、突然思い立ったように電話をかけた。
「うむ。そういうわけだ、よろしく頼むぞ！」
「あっ、あの、今の電話は？」
「ああ。君たち二人が同棲できるように手配しておいた。早速今日から一緒に移り住んでくれたまえ」
「ど、同棲って……えええー！？」
「はわわっ！？　司令官と一緒になのですか！？」
突然の司令長官の提案に、僕と電は同時に驚きの声をあげる。
「指輪の発生条件に二人の親密度が関わっているのなら、共に過ごす時間が多い方がいいだろう」
本来提督と艦娘との同棲はご法度だが、これも人類の命運がかかってるが故だって、司令長官は真顔で力説するんだ。
「確かにそうかもしれませんが……」
でも、いきなり年頃の女の子と一緒に暮らせだなんて、心の準備が。
「あっ、あのっ……！　司令官は電と一緒はイヤですか？」
「うっ！　ううんっ！　そんなことない、そんなことないよ！！」
命の恩人である君と同棲できるだなんて嬉しいに決まってるよって、僕は顔を赤らめながら想いを伝えた。
「電も同じ気持ちなのです。不束者ですがよろしくお願いしますね、司令官」
電はニッコリと笑って、僕との同棲を喜んでくれた。
こうして僕と雷は再会し、成り行きで共同生活を営むことになったんだ。

「電、ゴメン、先に行っててくれないかな」
執務室を後にしてしばらく一緒に歩いた後、僕は立ち寄りたい所があるって、一旦電と別れることにしたんだ。
「了解なのです。先に荷物をまとめて向かってますね」
電はペコリと頭を下げて、とことこと艦娘の宿舎の方へと向かって行く。
「ここか……」
電と別れた後、僕は鎮守府の片隅にある部屋を訪れた。扉の上には「戦史資料室」と書かれていて、扉には「関係者以外立ち入り禁止」の札が掲げられていた。
「失礼しまーす」
僕はコンコンと扉を叩き、資料室の中へと入って行ったんだ。
「おっ！　らっしゃい」
資料室の中に入ると、カウンターの椅子に腰掛けながら新聞に目を通していた六十歳くらいの気さくな雰囲気のおじいさんが、僕に声をかけてきた。
「ほぉ……こりゃまた随分と若い提督だな。背格好から見るに、オメェさんが噂の〝少年提督〟かい？」
「はい、そうです」
おじいさんの問いかけに僕はコクリと頷いた。鎮守府には提督が複数人いて、みんな自分の特徴を冠した二つ名で呼ばれるのが通例となっている。
僕は見た目まんま幼いから、少年提督ってわけだ。
「そうかいそうかい。俺はこの資料室で司書をやってる川本ってんだ」
以後よろしくなって、川本さんはにこやかな顔で僕に自己紹介した。
「で、何の資料をお探しだい？」
川本さんは何度か頷いた後、僕に訊ねてきた。
「はい。駆逐艦電の資料を」
「電ねぇ。海戦全般を扱った物や艦艇そのものの略歴を記した物があるけど、何がお目当てだい？」
「そうですね。とりあえず電に関する資料をありったけ」

「あいよ。ちょいと持って来るから、そこの机に腰掛けて待ってな！」
川本さんは重い腰を上げると、軽快な声で資料室の奥へと向かって行ったんだ。
戦史資料室。それは艦娘たちが命を持たない艦艇だった、〝あの戦争〟における記録を綴った史料を収めた部屋だ。
艦娘たちはみんな前世界での記憶を持っていて、それらの証言をまとめて本にしたってわけだ。
「お待たせ、お待たせ。こいつが電に関する資料だ」
数分後、川本さんは数冊の本を持って来て、机の上にドンって置いたんだ。
「あれっ？」
本を置いた手に目を向けると、川本さんの左手の人差し指と中指がないことに気付いた。
「川本さん、その指」
「ああ、これかい？　若い時に無茶やっちまってなぁ。その時の勲章みたいなもんよ。わっはっは！」
川本さんは自分の指が足りないことをちっとも気にせず、豪快に笑い飛ばしたんだ。何だか随分と気さくな人だなぁ。
「指って言えば、オメェさんの左手の薬指にはめているのが、噂のケッコン指輪かい？」
ちょいと見せてくれねぇかと川本さんが訊ねてきたから、僕はコクリと頷いた。
「ほう、ほう。こいつがねぇ……」
川本さんは興味津々な目で、指輪を眺め続けたんだ。
って、あれっ？　ケッコン指輪は最優先機密事項なはず。どうして一介の司書に過ぎない川本さんが知ってるんだろう？
「ありがとよ！　その指輪がどんな代物か俺には分からんが、この戦争を打開するものであることを願ってるぜ」
川本さんは一瞬真剣な眼差しをしたかと思うと、また気さくな顔に戻って、軽快に左手を振りながらカウンターの方に戻って行ったんだ。
「さてと……」
川本さんが立ち去ると、僕はゆったりと椅子に腰掛

けて、電に関する資料を読み始めた。
「駆逐艦電。特型駆逐艦暁型四番艦。昭和七年十一月十五日竣工、昭和十九年五月十四日戦没か……」
資料には、電の戦歴が詳細に記されていた。少しでも彼女のことが知りたい。そう思いながら僕は資料を読み耽ったんだ。
電は主に船団の護衛任務に従事していたようで、さしたる戦果は挙げていない。そんな電の特徴的なエピソードが、スラバヤ沖海戦での敵乗務員の救助だ。
戦時下にあり、敵兵は殺したいほど憎い存在のはず。そんな相手を救助できるだなんて、そうそうできることじゃない。
でも、あの時僕に向けてくれた優しい手つき。敵兵を助けるほどの心優しさを兼ねているからこそ僕を助けてくれたんだなって、今更ながら感謝の念が湧いてくる。
「少年、夢中になってるとこ申し訳ねぇが、閉館時間だ」
川本さんに声をかけられ、資料室にかけられた柱時計に目を向ける。時計の針はもう二十時を指そうとしていた。ここに来た時はまだ日が浅かったから、いつの間にか大分時間が経っていたんだな。
「すみません、こんな時間まで。また来ます」
まだまだ知りたいことは沢山ある。時間をかけてもっともっと電のことを知ろうって心に決めて、僕は川本さんに一礼しながら資料室を後にした。

電との共同生活に当てられた住居は、鎮守府から徒歩三十分ほどの場所にあった。木造平屋の一軒家で、寮とかじゃない。
男ばかりの寮に紅一点の艦娘を入れるわけにもいかないって判断からしいけど、こうまで特別扱い続きだと、何だか申し訳ない気持ちになってくるなぁ。
「あれっ？」
いざ家に入ろうとすると、香ばしいカレーの匂いが漂ってくる。
「ただいまー」

「あっ、お帰りなさいです、司令官」
家の中に入り台所まで赴くと、そこには割烹着姿でカレーを作っている電の姿があったんだ。
「電、先に来ていたんだね」
既に夜の八時を回っているんだから当然なんだけど、誰かが料理をして待ってくれている家に帰るなんて新鮮で、僕は驚きを隠せなかった。
「荷物をまとめて来たら司令官がなかなか帰って来ないので、お買い物してお夕食を作っていたのです」
そう言いながらご迷惑でしたかって、電は弱々しい声で訊ねてくるんだ。
「迷惑だなんてそんなことないよ。ありがとう」
逆にこっちが申し訳ないくらいだよって、僕は感謝の言葉を送りつつ、ちゃぶ台に座って電の料理ができるのを待ち続けたんだ。
「お待たせなのです！」
しばらくすると、電が皿にわけられたカレーを運んできた。
「ありがとう電。早速いただくよ」
僕はお礼の気持ちを込めながら手を合わせて、カレーを食べ始めた。
「電のカレー、どうでしょうか、司令官？」
美味しくなかったらごめんなさいなのですと言いながら、電は自信なさげな声で訊ねてくるんだ。
「ううん、美味しいよ。家庭的な味で」
多分母の味ってこういう感じなんだろうなって、僕は率直な感想を電に伝えた。
「あっ、ありがとうなのです！」
司令官に褒められて感激なのですって、電は満面の笑みを僕に向けてくれる。
「ごちそうさま。僕の方こそ本当にありがとう」
食べ終わってまた手を合わせると、僕は徐に電の方を向いて深々とお辞儀したんだ。
「しっ、司令官！？」
そんなに感謝されても困るのですって、電はあたふたと戸惑う。
「ううん。料理のことだけじゃなくて、あの日僕を助けてくれたこと。ずっとずっと感謝の言葉を伝えたか

った」
　鎮守府で再会した時は上手く言い出せなくて、ようやく想いを伝えることができたって。
「……。電は、そんなに感謝されることをしてないのです……」
　だけど電は、悲しげな声で呟くんだ。
「どういうこと？」
　電は語る。あの日の電は別の輸送船団の護衛中で、その最中深海棲艦と遭遇したらしい。
「でもあの時、いざ潜水艦を攻撃しようとしたら、足が震えて攻撃できなかったのです……」
　自分が怯んでいる間に敵潜水艦は逃亡し、その生き残りが僕の乗っていた船を襲ったんだって、電はシュンとした声で真相を語った。
「もしあの時電がちゃんとしていれば、多くの命が助かったかもしれないのです……」
「……」
　そう――あの時の襲撃で生き残ったのは、電に助けられた僕だけ。あとの乗務員はみんな、船と一緒に海の藻屑になったんだ。
「確かにその一面はあるかもしれないよ。でもさ、一番悪いのは深海棲艦なんだから、電が謝ることじゃないよ」
　僕は電の頭を優しく撫でながら諭した。
「しっ、司令官！？」
　頭を撫でられた電は、まるで温もりに包まれた子犬のような顔をするんだ。
　駆逐艦娘は、本来対潜を主任務の一つとする。にも関わらず電が臆してしまったのには、深い理由がある。
（艦娘は、艦艇だった時の因果を背負っているか……）
　それが、座学の時に教えられたことだった。
　例えば、幸運艦と称されていた艦娘は被弾率が低く、逆に被害担当艦だった艦娘は、損傷率も高いって。
　電の最期は、敵潜水艦による雷撃。艦艇だった時自分を殺した存在に恐怖したって、何も不思議じゃない。
「だれだって得手不得手はあるよ。潜水艦が苦手なら、これから克服していけばいいんだし」
　そう言って僕は明日以降対潜能力を鍛える演習を集

中的に行うよう申請するって、電に語ったんだ。
「あっ、ありがとうなのです！　司令官の期待に応えられるよう、精一杯頑張るのです！」
電は元気いっぱいな声で意気込みを語ってくれる。
「うん！」
僕は電の手をギュッと握って、誓い合った。
「あっ？」
するとその瞬間、僅かに二人の指輪が光ったんだ。
「今、ちょっとだけ司令官と心が通じ合った気がするのです」
「うん、僕もだよ」
多分、お互いの新密度が高まったことで、ケッコン指輪の効果が表れ始めたんだろう。どういう効果かは分からないけど、演習の時試してみる価値はありそうかな。

「それではお休みなさいなのです、司令官」
夕食後しばらくして、僕たちは床に就いたんだ。さすがに一緒に寝るのはまだ恥ずかしいからって、別々の部屋だけど。
（父さん、ようやく僕、提督になれたよ……）
僕は豆電球に照らされたケッコン指輪を見つめながら、心の中で呟いた。
あの日の事故で父さんを失って以来、僕はずっと復讐を抱き続けていた。
電の技術はまだまだ未熟かもしれない。でも、成熟すれば念願だった仇討ちができる。深海棲艦をこの手で葬るまで僕の心が安堵することはないんだって思いながら、僕はゆっくりと目を閉じたんだ。

艦娘の特殊性として挙げられるのは、各種兵器の増大性だろう。彼女たちの装備は実艦と比較して著しく小型だ。にも関わらず、その威力は実際の艦艇装備と遜色ない。

同様の兵器を通常の人間が使用しても、威力は微々たるものでしかない。

無論、艦娘をサポートする妖精の恩恵も大きい。だが、人間は妖精の恩恵を受けられない。これは推論でしかないが、艦娘が妖精と精神的な繋がりを得ることで何かしらの作用を発しているのではないかと。

ではもし、人間と艦娘との精神的な繋がりが叶ったとしたら？

兵器の増大とは異なる次元の力が引き出せるのではないか？

人と艦娘のチャネリングの実現こそが、私が生涯を懸けるに相応しい研究だと思い立った次第だ。

第二章・対決！　第六駆逐隊

翌々日、僕たちは潜水部隊の提督の協力を得て、対潜演習を行うことになったんだ。
「今日はわざわざ演習に付き合ってくださりどうもありがとうございます、根暗提督」
「も、問題ない……。敵潜水艦撃滅は急務なんだな……」
潜水部隊を指揮する、通称根暗提督。制服をほっかむりし「ながらしゃがみ込み、ブツブツと呟きながらノートパソコンを操作する様は、確かに根暗っていう言葉がピッタリだなぁ。
潜水艦娘は灯りのない海中でひたすら敵を待ち付ける過酷な任務だから、明るい所が大嫌いな根暗提督とは相性がいいそうだ。
「ところで演習相手は？」
「ボクちんの、最強の子を用意したんだな……」
「はわわっ？　一番強い子なのですか？」
いきなりそんな相手との演習は大変なのですって、電は及び腰になっちゃった……。
「レベリングしたいなら、強敵の方が経験値を稼げるんだな……！」
不気味な笑みを浮かべつつ、根暗提督は演習相手の潜水艦娘を呼び出した。
「は～～い！　巡潜乙型三番艦、伊一九なの～～！　よろしくなの～～！」
すると、根暗提督とは対照的な、活発な少女が姿を現したんだ。
伊一九と名乗る彼女は水色のツインテールに、イ１９と書かれたスクール水着を着ていた。何より特徴的なのはその胸元で、背丈は電と同じくらいなのに、膨らみの差は歴然としてたんだ。
「よろしくお願いします、伊一九」
「イクって呼んでいいのー！　君が噂の少年提督なのね。お手並み拝見なのー！」
イクは僕に近付きながら、ニヤニヤとした上目眼遣いで僕を舌なめずりするように眺めるんだ。
「は、はぁ……」
ただでさえ大きな二つの膨らみが眼前に広がり、ついつい僕の視線はその大きな胸元にいってしまうんだ。

「あのっ、司令官、さっきからどこを見ているのですか？」
「わぁっ！　何でもない、何でもないー」
電に声をかけられ、僕はビクッとしながら淫らな気持ちになっていたことを必死に否定する。
「よろしくなのです、イクちゃん」
「よろしくなのー！　最初に言っておくけど、イクは潜水艦頑苦手な娘にも情け容赦無用なのね～～!!」
「はわわっ!?」
イクの挑発に、電は早くも気圧されてしまう。やれやれ、始まる前からこんな調子で大丈夫かなー？

「じゃあ、演習の方法を説明するんだなだな……」
根暗提督が演習の概要を説明し始める。まずはイクが演習海域に潜航する。しばらく経った後、電が作戦海域へと進出する。
お互いの場所は通達されず、索敵を行う。相手を見つけ次第攻撃を開始し、先に被弾した方の負けってルールだ。
「ふふーん！　最初の一発は撃たせてあげるのね」
演習開始前、イクは自信満々に宣言した。ようはイクの方で先に電を発見しても先制攻撃をせず、相手の攻撃を待って反撃するってわけだ。
圧倒的に電に有利なハンデだけど、それだけ劣勢でも勝てる自信があるってことか。
「こちらに断る理由はないよ。いいよね、電」
「はい、なのです！」
「了解なのー！　それじゃイク、先に行くのー!!」
そうしてイクは意気揚々と潜り始め、作戦海域へと進出したんだ。
「電、そろそろ時間だ」
「はい。出撃なのです！」
三〇分後、電は演習海域へと進出した。ここからは無線で連絡を取り合うことになる。お互いの距離が離れている中、いかに正確迅速に指示を送れるかが要だ。
「電、落ち着いて音を聞き分けるんだ」
イクはどこから仕掛けて来るか分からない。まず僕

はある地点に留まり、そこで音を感知するよう指示を出したんだ。
洋上戦では索敵によって、いかに相手を早く見つけられるかが重要だ。海上では目が大切なのに対して、海中から攻め入って来る潜水艦相手には耳が大切だ。
具体的には聴音機を用いて、水中の音を聞き分ける。ちょっとした音の違いを聞き分け対処しなきゃならないから、神経の使う作業だ。
「何も、聞こえないのです」
数分後、電から未発見の報告があった。
「了解だよ。場所を移動して」
数分間その場に留まり探知できなかったら、場所を移してまた同じ作業の繰り返しだ。
「！　司令官、音が聞こえるのです！！」
三回ほど探知を繰り返して、ようやく電はイクらしき音を感知したようだ。
「よし！　爆雷投下だ！！」
「なのです！」
電は元気よく返事して、演習用の爆雷を海中に投射した。これでイクに命中すれば爆音が生じ、電の勝利が確定するはずなんだけど。
「はわわ……」
だけど、しばらく聴音機で探知しても、爆雷が命中した音はまったく聞こえなかったんだ。
「ククッ……フフッ……！　こっからはボクちんたちのターンなんだな……！！」
電の攻撃が終了すれば、イクの反撃が開始される。根暗提督は低い唸り声をあげながら、イクに指示を出し始めた。
「司令官！　三時の方向から魚雷が二本こっち向かって来るのです！？」
刹那、電がイクの放った魚雷の航跡を発見した。
「電、落ち着いて避けるんだ！」
魚雷はまっすぐしか進まない。艦船と違い人間サイズの艦娘では、航跡さえ見えていれば回避は容易なはず。
「あっ、当たらないのです！」
予想通り、電は攻撃をかわした。あとはこっから反

撃して返り討ちだ！
「はわわっ！？　今度は九時の方向から！？」
「何だって！？」
だけどその刹那、反対側からまた魚雷が迫って来たんだ。まさかこの短時間で移動しつつ二撃目を放ったっていうのか！？
「電、緊急回避！」
「まっ、間に合わないのですー！？」
態勢を立て直す間もなく二の矢が放たれ、電は狼狽しながら攻撃を食らってしまった。
こうしてイクとの演習は、電の敗北で幕を閉じたんだ。

「ふっふん～～！　これが海のスナイパー、イクの実力なのね！」
演習が終わり帰投したイクは、勝ち誇った声で自らの勝利を喜んだ。
「はわわ……負けちゃったのです……」

一方の電は、演習用のペイント弾塗れになった身体で、しょんぼりしながら僕の元へ帰って来たんだ。
「司令官、ごめんなさいなのです。電、全然ダメでした……」
「どんまい。初撃をかわせただけでも、今回は及第点だよ。今後は二撃目以降も考慮して演習を続ければ、いつかは勝てるさ」
僕は電の頭を優しくポンポンって撫でながら慰めたんだ。
「そういうわけで、根暗提督。機会があればまた」
今度はもう少しランクダウンしてと付け加えて、僕は再戦をお願いしたんだ。
「えっ、演習に付き合うのは構わないんだな。でっ、でも、そんな悠長なこと言ってられる戦況でもないんだな……！」
「はい。分かってます……」
そう――艦娘の活躍によって、本土周辺の大型艦は駆逐されつつあった。
だけどそれと入れ替わるように、鎮守府近海には敵

潜水艦が多数出没するようになった。
敵潜水艦の容赦ない通商破壊によって、本土と海外とのシーレーンはズタズタに切り裂かれてしまった。
軽巡や駆逐娘たちが対潜掃討に勤しんでいるけど、電のように潜水艦を苦手とする娘は多く、戦況は芳しくない。
更には敵潜水艦が出没してない時期に西方海域の攻略に出た、高速戦艦、正規空母を基幹とした部隊が、本土に帰投できない事態にもなっている。
戦艦や正規空母は対潜能力が皆無。なまじ大型主力艦中心で軽巡以下の艦娘をあまり随伴させなかったのが仇となっているんだ。
だから一刻も早く状況を打破するため、電の訓練に時間を費やしてる余裕がないのが実情だ。
「とりあえず、今日の演習はここまで。ありがとうございました、根暗提督」
「まっ、またなんだな……」
僕は感謝の気持ちを込めた敬礼をして、根暗提督と別れたんだ。

その後は時間も時間なんで電と一緒に昼食を取ることにした。僕は着替えなければならない電より先に、食堂へと赴いた。

食堂は艦娘と提督の憩いの場となっている側面もあって、入り口から中を眺めるだけでも、かなり盛況なのが手に取るように分かる。
「えーと。何を食べよう……」
僕は食堂に入ると、券売機に書かれたメニューをまじまじと眺める。何せ初めて来る食堂だから、どんなメニューがあるのかさっぱり分からないんだ。
メニューをざっと眺めると、ラーメンとカレー中心で、肉や魚料理は少ない。これは深海棲艦の影響でまっとうに漁ができなかったり、海外からの輸入も滞っていたりするのが原因だ。
「ん？　何だこれは？」
券売機の端っこに記された、「赤城盛り」というボタン。恐らく正規空母の赤城のことなんだろうけど、一

体何の食べ物か皆目見当もつかない。
「すみませーん、この赤城盛りってどういうメニューなんでしょうかー？」
　気になって仕方ないので、僕は思い切って食堂の人に訊ねてみることにした。
「ああ、それかい。赤城がたらふくご飯食べるもんだから、それにちなんでつけたものだよ」
　すると、六十代の優しそうなおじいさんが答えてくれたんだ。こういう食堂は壮年の女性が働いているイメージがあるから、男の人が切り盛りしてるのは、ちょっと意外だなー。
「具体的にどれくらいなんです？」
「そうさのう……。大体三合くらいじゃのぅ」
「さっ、三合！？」
　赤城って人は、そんなに食べるのか！？　詳しくおじいさんに話を聞くと、一食でそんなに食べる艦娘はそうそういなく、基本的に赤城専用メニューになっているということだった。
「随分と優遇されているんですね」
　ご飯を何杯も頼まれるよりは効率が良さそうだけど、わざわざメニューにしているくらいだから、随分な高待遇だなって。
「まあ、あいつとは付き合い長いからのぅ……」
　どこか懐かしむ眼差しをするおじいさん。ひょっとして、引退した提督なんだろうか？
「儂はこの食堂の店主の東雲というものじゃ。以後よろしくな」
　おじいさんは自己紹介しつつ、赤城盛りを頼むのか訊ねてくる。
「うーん。じゃあラーメンで」
　さすがに三合も食べられないので、僕は普通に醤油ラーメンを頼むことにしたんだ。
「お待たせなのです」
　それからしばらくして、電が食堂に姿を現した。
「奢るよ。何がいい？」
「はわわ！？　困るのです……」
　演習で惨敗したのに司令官に奢ってもらうのは申し訳ないって、電は手をぶんぶんと振りながら遠慮する。

「いつもご飯作ってくれてるだろ？　そのお返しだよ」
「そっ、そういうことなら司令官に甘えるのです」
少しそわそわしながらも、電はこくりと首を縦に振ったんだ。
「で、何にする？」
「えーと、それじゃあ……このお子様ランチを……」
電はもじもじしながら熟考し、お子様ランチのボタンを指差した。
「おっ、お子様ランチ！？」
見た目的には確かに電はお子様なんだけど、意外な注文についつい目を見開いてしまう。
「だっ、駄目でしょうか？　気になって仕方がないメニューなのです」
「どういうこと？」
何だか訳ありみたいで、僕は詳しい理由を訊いてみることにしたんだ。
「実は食堂にはいつも姉妹と一緒に来ていたんですが……」

ここで言う姉妹とは、同じ暁型駆逐艦の暁、響、雷の三人のことらしい。厳密には吹雪型と綾波型も姉妹艦らしいけど、基本的には四人姉妹という認識なんだそうだ。
「お子様ランチを頼もうとすると、暁ちゃんがむすっとして頼めないのです……」
暁は「一人前のレディとして扱ってよね」が口癖らしく、お子様扱いするとぷんすか怒るのだそうだ。だからいかにも子供の食べるお子様ランチは、不倶戴天の敵とかそんな感じのメニューらしいんだ。
「他のメニューは大体食べたことあるのですが、お子様ランチだけはまだなくて」
「分かったよ。そういう事情なら頼んであげる」
別に最初から何頼んでも構わないって思ってたけど、一度も食べたことがないって言うんなら、是が非でも頼まなくっちゃ。
「わぁ！　ありがとうなのです！」
券売機のボタンを押して券を渡すと、電が満面の笑みを浮かべたんだ。

「？」
その無垢な笑顔を前にして、僕は思わずドキッとしてしまう。電はいつも自信無さげな顔をしている。だから、こういう年相応の笑顔を見せてくれると、心がときめいてしまうんだ。
『あっ！』
次の瞬間指輪が少し光り出して、僕たちは同時に驚いた。どうやら今ので、また新密度が高まったみたいだ。
「また司令官と、ちょっとだけお近付きになれたのです」
「うん！」
僕たちは心が通じ合ったのを喜びながら、二人で並び歩きながら席の方へと向かって行ったんだ。

「こっ、これがお子様ランチなのですか……！？」
席の方に運ばれたお子様ランチを目の前にして、電は驚きの声をあげる。お子様ランチは旭日旗が立てられたオムライスにフライドポテト、ラムネが付いたセットだ。
「じゃあ、早速食べよっか」
「はっ、はい、いただきます」
電は手を合わせありがたみを感じながら、ゆっくりとオムライスを口にし始めたんだ。
「どんな味？」
「とっても、とっても美味しいのです！！」
念願のお子様ランチを食べられて、電は頬を赤くしながら絶賛する。
その光景を微笑ましく眺めながら、僕もラーメンを食べ始めたんだ。
「あー！？」
しばらくすると、やたらと甲高い悲鳴が食堂に響き渡った。
「何だ何だ！？」
一体何が起きたんだって、僕は周囲をキョロキョロと見回す。
「いっ、いっ、電がお子様ランチ食べてるー！？」

すると電の後ろ側に、眼を見開きながら指差してる、帽子を被った黒髪な艦娘の姿があった。
「ほう、これは珍しいな」
「へぇ。鬼の居ぬ間にって奴ね。やるじゃない」
更にその後ろには、水色の髪で理性沈着な感じの艦娘と、電と瓜二つで活発な雰囲気の艦娘がいた。
「暁ちゃん！　それに響ちゃんと雷ちゃんも？」
どうやらさっき話してた姉妹三人のようだ。成程、言われてみればみんな、どことなく電と顔立ちが似ているな。
「君が噂の少年提督かい。私は響。そしてこっちが暁で、こっちが雷だよ」
水色の髪の子が淡々とした声で自己紹介をした。黒髪の子が暁で、電そっくりな子が雷とのことだ。
「どーいうことよ、電！　あれほどお子様ランチはダメだって言ってたじゃない！？」
自分が見ていない隙にお子様ランチを食していたことに、暁は怒り心頭のようだ。
「ごっ、ごめんなさいなのです！　司令官が奢るって言ってくれたから、つい頼んじゃったのです！？」
「なぁんですってー！？」
原因が僕にあると分かるや否や、暁はドンドンと床を叩くように近付いて来る。
「ちょーっと、どういうことよ！？」
暁の許可なく食べさせるだなんて許さないんだからねって、暁は僕の目の前でダンッとテーブルを叩きながら抗議する。
「電は僕の大切な艦娘だ。僕が厚意を寄せるのに君の許可を得る必要はないね」
ここで引き下がったら電のためにならないって、僕は臆することなく反論した。
「あったまきたー！　同棲のことといいお子様ランチのことといい、もう我慢の限界よー！！」
売り言葉に買い言葉。暁はとうとう堪忍袋の緒が切れたらしく、憤怒の表情で僕を糾弾するように指差す。
「こうなったら勝負よ勝負！　暁たちとあなた、どっちが電に相応しいかの！！」
そして唐突に勝負を持ちかけてくるんだ。

「あ～～あ。やっぱりこういう展開になっちゃったかー」
「説明するよ。実はかくかくしかじかこういうことなんだ」
　呆れ顔で苦笑する雷の横で、響が語り出す。何でも四人は艦艇時代第六駆逐隊という部隊に所属していたらしく、その名残で部屋も四人一緒だったそうだ。
　それが急に電が僕との同棲が決まって、暁は腑に落ちず、この間から不満を溜めていたそうだ。
　そして愚痴を言いながら食堂に赴いたら、電がお子様ランチを食べているところを目撃してしまい、我慢の限界が突破したとのことだった。
「勝負？　演習ならいつでも受けて立つよ」
　姉妹相手なら電も多少は肩の力が和らぐだろうって、僕は二つ返事で了承した。
「言ったわね！　じゃあ今日の午後、早速演習よ!!」
「演習は構わないけど、どういう勝負を持ちかけるつもりだい？」
「えっ!?　えーっと……三対一よ！　暁たち三人と電との勝負。あなたの指揮の元暁たち三人を倒せたら、関係を認めてあげてもいいわよ!!」
　どうやら何も考えてなかったらしく、暁は響に突っ込まれるとしばし頭を悩ませ、思い付くまま概要を喋り出した。
「はわわ!?　暁ちゃんたち三人となのですかー!?」
　いくらなんでも勝ち目ゼロなのですと、電は戦う前から敗北を確信してしまった。確かに三対一は圧倒的に不利だ。正攻法じゃまず勝ち目がない。
「ちょっと、ちょっとぉー！　単純な三対一はいくらなんでも厳し過ぎないかしら？」
　そんな時、雷が異議を唱えた。
「うっ……。だったら雷はどんな条件ならいいっていうのよ」
　暁は一瞬たじろいだけど、姉の威厳を示すように、雷に言い返したんだ。
「そうねぇ。アタシたちは一発食らえば撃沈判定だけど、電は三発までオーケーってのはどう？」
　これなら勝利に必要なヒット回数は変わらないでし

よって、雷は提案する。ここで電に加勢して二対二とか言ってくれたらありがたかったんだけど、雷も三対一そのものには異論がないみたいだ。
「分かったわよ。その案で行くわ」
「待って。せっかくだからここはもう一つ条件を加えてみるのはどうだい？」
続けて響が提案し出した。
「条件って？」
「勝負は同航戦じゃなく、反航戦で行う」
この条件ならより少年提督の技量を計れるって、響は持論を展開する。
「面白そうね！　というわけで、少年提督！　改めて勝負を持ちかけるわ！！」
条件が厳しくなったからって今更後には引かないわよねって、暁はビシッと指差しながら宣戦布告する。
「分かったよ。それで行こう」
僕は静かに頷いて返答した。こうして第六駆逐隊四人姉妹による演習の幕が、切って落とされたんだ。

その後更に詳しいルールが話し合われて、演習の形式が決まった。
まず演習は、ブイで囲まれた二海里の演習海域をめいいっぱい使う。対戦形式は反航戦で、反転は端に着くまで不可。電は中央で、他三人は隅からの戦闘開始となる。反航戦の形式さえ保っていれば、暁たち三人の合流はＯＫだとのことだ。
装備武器は模擬弾仕様の一二・七センチ連装砲及び六一センチ三連装魚雷。勝敗は電が他三人に一発当てるか、三発食らうか。弾切れになった場合は、残った人数が多い方が勝ちだということだ。
「改めて条件を見てみると、厳しいな……」
一見公平のように見えて、暁たちの方が圧倒的に有利だ。合流されると厄介なのはもちろんのこと、相手の弾薬はこっちの三倍だ。
あっちが弾切れになる心配はまずなく、こっちに弾が残っていたとしても、相手を二人以上倒さない限り勝利とはならない。

そして厄介なのが反航戦だということだ。同航戦は互いに並びながら砲雷撃戦を行うのに対して、反航戦はすれ違い様の戦闘だ。

反航戦は同航戦に比べて交戦時間が短く、反対に動く相手に当てなきゃいけないので、必然的に命中精度も下がる。

ただでさえ弾薬量で不利なのに、反航戦となれば無駄撃ちはできない。三発まで耐えられるとはいえ、非常に厳しい戦いだ。

（それでも、やるしかないんだ……！）

僕は拳をぎゅっと握りながら闘志を燃やした。若干十四歳で提督になれたのは、父さんが遺したケッコン指輪のお蔭。そのことに不満を抱いている者は多い。

だから僕は実力を示して、親の七光りじゃないってことを証明しなくちゃいけない。

暁たちは、電と最も親しい姉妹だ。僕の実力を最初に認めてもらうのにはこの上ない娘たちだし、何より姉妹に認められなければ、僕もその程度の人間だってことにしかならない。

「いいかい、電。演習が始まったら、まずはどこか片隅に行くんだ！」

開始時刻が迫る中、僕は電に作戦を説明したんだ。演習を行うにおいて、一番避けなきゃならないのは、三人に合流されることだ。こうなってしまえば、こちらにもう勝ち目はないだろう。

だから三人がバラバラにスタートしたうちに、確実に一人倒さなきゃいけないんだ。

「わっ、分かりましたのです！」

電は額に冷や汗をかきながらも、ぐっと拳を握った。

三人と電の最大の違いは、あっちに提督がいないってことだ。

つまり、僕の指揮能力が、電の勝利に大きく関わっているってことだ。電のためにも、そして僕自身のためにも、この演習は絶対に勝たなくちゃならない！

一四〇〇。演習開始の時間だ。

「電！　方位四五度に前進！！」

開始早々、僕は北東方面に進出するよう指示を出した。

「なのです！」

電は素直に指示に従い前進し出した。僕は陸上待機で、電とは無線で交信しつつ、電の頭に付けられた小型カメラで戦況を分析する格好だ。電から送られた情報を整理して、いかに適切な指示を出せるかが勝利の鍵だ。

「！　電探が捕らえたのです！」

しばらくすると、早速電から発見の報告があった。

「了解。誰だが分かる？」

「そこまでは。もうちょっと近付けば分かるのです」

「分かったよ。迎撃準備をしつつ、前進を続けて」

「了解なのです！」

電探に引っ掛かったってことは、近い内に会敵となる。こっからは気を引き締めて臨まなきゃ。

「！　見えて来たのです。相手は……雷ちゃんなのです！」

数分後。電から発見報告があったんだ。

（雷か）

その名を聞いた瞬間、僕は僅かばかりホッとした。雷は最初に勝負の内容に口を挟んだ子だ。少なくとも、他の二人よりは相手しやすいはず。

「はわわ！？」

だけどその刹那、電が悲鳴をあげたんだ。

「どっ、どうしたの、電？！」

「魚雷が迫って来るのです！？」

「何だって！？」

電の報告に、僕は驚きを隠せなかった。何故なら通常の砲雷撃戦は、まずは遠距離からの砲撃に始まり、徐々に砲撃距離を縮め、最後に残った敵を魚雷で仕留めるっていう流れがセオリーだからだ。

潜水艦や甲標的による先制雷撃もあるけど、駆逐艦が先制雷撃するなんて聞いたことない。前例のない攻撃に完全に虚を突かれて、僕の頭は混乱してしまう。

「電、右舷に緊急回避！」

とにかく回避すれば問題ないって、僕は急いで指示を出した。

「はっ、はいなのです！」
電はあたふたしながらも雷撃を回避して、事無きを得たんだ。
「ジャーン！　雷さまのお通りよ！！」
だけどその隙を突くように、雷が急接近して来た。
「はっ、はわわっ？！」
「アタシは別に二人の関係はいいって思ってるんだけどさー。だからって勝負事で手加減はしないわよ！」
雷は戦いに情け容赦は無用って感じに、連装砲の火を噴く。
「はうっ？！」
電は回避に専念するものの、避け切れずに一発食らってしまった。
「じゃあ、まったねー！」
雷は務めを果たして颯爽と過ぎ去って行く。
「くっ、なんてことだ……」
こっちが一発当てるどころか、逆に食らってしまった。完全に僕のミスだ。初戦が雷だってことで慢心が生まれ、適切な作戦指示を送れなかった。

「電、ゴメン……。次は絶対にミスしないから！」
僕は電に謝罪しつつ、両頬をパンッと叩いて自分に喝を入れたんだ。もう失敗は許されない。次こそは必ず汚名を返上してみせるって。
「電は、司令官を信じるのです！」
電は僕の至らなさを責め立てるのでもなく、全面的な信頼を寄せてくれる。その想いを大事にして作戦に臨まなきゃ！
「電、暁たちは恐らく、二人以上で攻めて来る」
残り二発で勝利なのだから、複数人で集中砲火して一気に勝負を決めるだろう。つまり、そこを逆手に取れればこっちにも勝機があるはずだって、僕は作戦を伝えるんだ。
「……。でも、それは、そのっ……！」
作戦を伝えるや否や、電は不安気な声で言葉を濁す。
「分かっているよ、君のトラウマに触れることは。でも僕は何も再現しろって言ってるわけじゃない。敢えて近い状況を作ることで、困惑させるんだ」
「……。了解なのです。司令官を信じます！」

電はしばしの沈黙の後、力強い口調で頷いたんだ。
「ありがとう。じゃあ早速、反撃開始だ！」
「なのです！」
そうして電は端まで進んでから反転し、戦闘海域へと舞い戻る。
「司令官！　こっちに二人で向かって来るのです！！」
十数分後、電の電探が艦影を捕えた。
「了解だよ。こっちの予想通りだ！」
例の作戦でいくよって伝達して、電は静かに了解してくれたんだ。さぁて、ここからが正念場だ。
「見えたわ！　手加減無用よ、雷！」
「分かってるわ！」
次第に見えて来た艦影は二つで、右側が暁で左側が雷だった。響の姿が見えないけど、二対一なら作戦の実行には最適だ。
「やあっ！」
「ってー！」
電が射程圏内に入って来るや否や、二人は同時に砲撃し始めた。
「電、回避に専念だ！」
「なのです！」
電は作戦に従い、右に左にと、砲撃を回避し続ける。二体一では、どちらかの攻撃に集中してしまえば、片側への対応が疎かになってしまい被弾のリスクが高まる。ここは敢えて攻撃しないのが最適な手だ。
「なっ、何？！　攻撃しないってどういうことよ！？」
相手を攻撃しない限り勝利はあり得ない。だから当然攻撃して来るものだと思ってるはず。案の定暁は動揺しまくりだ。
「へぇ。なかなか面白い戦法使って来るじゃない」
一方の雷は顔色一つ変えず感心するだけだ。先程先制雷撃を行うという奇抜な戦法を行った雷だ、この程度のことで動じないのは想定済みだ。
「よし！　最大戦速で突っ込め電！！」
「なのです！」
電は航行速度を上げ、暁にぶつかるように前進する。
「なっ？！　まっ、まさかぶつかる気ー？！」
カメラ越しに、暁が顔面蒼白になっていくのが分か

る。
　電は艦艇だった時代、何度か衝突事故を起こしている。ある時の事故では駆逐艦の深雪を沈没させている。
　当然衝突事故は電にとってのトラウマなんだけど、同時にその恐怖は姉妹艦で共有しているはず。僕の目論見は見事的中して、暁は衝突のリスクに恐れおののいている。
「かっ、回避よ、緊急回避ー！？」
　暁は本能に従うように、右舷に回避する。
「やるじゃない！　でも、脇がガラ空きよ！！」
　雷は感心しつつ、真っ直ぐ突っ込んで来る電に砲撃を行う。
「今だ！　左舷に緊急移動しつつ、砲撃開始！！」
「了解なのです！」
　暁の方に向かっていれば、当然回避を行う相手を狙うと認識するはず。その心理を逆手にとって、雷の方に攻撃を専念するんだ。
「ええー！？　きゃあっ！？」
　流石の雷も電が自分を狙って来るとは予想できておらず、近距離で攻撃を受けてしまった。
「雷！？」
　雷の悲鳴に動揺し、暁は思わず振り返ってしまう。
「きゃあっ！？　目がー！？」
　その瞬間、暁は強烈な西日に目を奪われてしまう。こっちが西に向かい、ある程度日光には慣れているのに対し、太陽を背にした暁たちはその眩しさに耐えられないはずだって。
「今だ、暁に向かって魚雷発射だ！！」
「命中させちゃいます！」
　電は右側を向きながら、暁に魚雷四本を発射した。
「ようやく目が慣れてきた……って、ぎょ、魚雷ー！？」
　目をゴシゴシしながら視力を回復させたと思った矢先魚雷が向かって来て、暁は狼狽しながら被弾してしまう。
「なっ、何よもうー！」
「しょうがないじゃない。少年提督の指揮力がそれだけ高かったってことよ」
　敗北を悔しがる暁に対して、近付きながら優しく宥

める雷。電は二人を尻目にしつつ、前進を続ける。
「よぉしっ！！」
やった、やったぞ！　一発も被弾せずに二人をやっつけた！！　こうまで作戦が上手くいくとは夢にも思っていなくて、僕は心の底から嬉しさがこみ上げてきたんだ。
「よくやったぞ、電！」
「ありがとうなのです……」
最大限の賛辞を送ると、電は静かな声で微笑んでくれたんだ。
これで残すところは響一人。こっちは二発まで耐えられるのに対して、響は一発で敗北。これでもう勝ったも同然だぞって、僕は早くも勝利を確信する。
「やあ、少年提督。二人から話は聞いたよ。一発も食らわずに二人とも倒したなんて、見事だね」
そんな時、突然響から無線が入って来た。
「さて、これで残すところは私と電だけ。そう――あの時と同じだ」
「？」
「！」
その声を聞いた瞬間、舞い上がっていた僕の気持ちは一気に引き締められた。
「その様子だと知っているようだね、電がどんな最期を迎えたかを」
「うっ、うん……」
「なら当然、その時私がどうしていたかもね……」
「……」
そうだ。電は響と一緒に給油艦を輸送任務中に撃沈された。つまり、響は目の前で最愛の妹を失ったんだ。
「……。あの時のことは、艦娘となった今でも記憶に刻まれているよ。電が被雷したのは、私と交代直後だった。もしもあの時自分が代わっていなければって、今でもよく思うよ……」
「……」
「だから私は生まれ変わった時誓ったんだよ。今度こそ電を守り切ってみせるって」
淡々とした声で語る響。だけどその声には確かな重みがあった。過去の過ちを繰り返さないという、大和型の装甲より硬い意志を。

「さて、少年提督。君は私に代わって電を守り切れる力量があるかい？　試させてもらうよ……！」
　そうして響は静かな闘志を燃やしながら通信を切った。
（そう言えばそうだったな……）
　今回の演習を反航戦で行おうと提案したのは、他ならぬ響だった。あの時は演習のルールをより具体的にするためだと思っていたけど、暁の突発的な提案に乗じて僕の力を試すつもりだったんだな。
「電、残すはあと響一人だ。楽に勝てる相手だと思わないで。最後まで気を引き締めて演習に励むんだ」
　僕は落ち着いた声で電に指示を出した。僕に対する怒りに身を任せて演習に挑んだ暁とは違い、響には確かな覚悟があった。
（響。君の覚悟はよく分かったよ。でもね、目の前で大切な人を失ったのは、僕も同じなんだよ……！）
　そう――君が目の前で電を失ったように、僕も父さんを失ったんだ。だから君の気持ちはよく分かるし、だからこそ君に代わって電を守り通せる自信がある。
　負けないよ。そう心に強く念じながら、響との決戦に臨んだんだ。

「司令官、響ちゃんが見えて来たのです！」
　反転してから数分後、電が響を発見したって報告してきた。
「了解だよ。電、射程圏内に入り次第、一斉射撃だ！」
　誰よりも強い信念を持って演習に臨んだ響に、小細工は通用しないだろう。だったら、とにかく手数を増やして一撃を加えるしかないんだ。
「なのです！」
　響が射程に入ったと認識した電は、指示に従って連装砲の火を噴いた。
「はわわっ！？　全弾外れたのです！？」
　だけど、響は颯爽と電の攻撃を避け切ったんだ。
「不死鳥の名は伊達じゃないよ。そう簡単に倒せるとは思わないことだね」
「はにゃあっ！？」